

杉村泰教先生のご退官に際して

羽村 貴史

杉村泰教先生のご退官に際し、言葉をお寄せする役割に、ずいぶん年齢のはなれた自分が適任なのかどうかはわかりませんが、先生に対する敬愛と感謝の気持ちをこめて執筆したいと思います。

杉村先生は、関西の高等学校や東北の高等専門学校にお勤めのあと、平成元年の秋に、小樽商科大学の教官として着任されました。実に20年以上の長きにわたり、われらが地獄坂を通われながら、本学の発展にご尽力いただいたこととなります。

杉村先生とはじめてお会いしたのは、かれこれ15年ほど前、まだ僕が大学院に在学する学生だったころ、本学の教官として採用されるにあたり、面接試験を受けた時のことでした。今回一緒に退官なさる君羅久則先生とお二人で、わざわざ関東地方の僻地にある大学の近辺まで会いに来てくださいました。緊張していたこともあり、当日の具体的な会話内容はあまり憶えていないのですが、おそらくは僕の論文審査を踏まえた上での関連するお話として、正確かつ精密にテキストを読み解くことの重要性について語られていたのではなかったかと思います。読むことの力を信ずる姿勢は、その後の先生との対話においてもたびたび窺われました。また、先生は、研究者として、教育者として、つねにそれを貫いてこられました。

杉村先生の印象といえば、何ととっても、その文学研究者としての威厳ある雰囲気と真摯な姿勢が最初に思い浮かびますが、同じように思われる方も少なくないのではないのでしょうか。査読付き学術雑誌に掲載された多くの論文のうち、だれもが認める一流誌においてだけでも6点——日本最大の英学雑誌『英文学研究』および *Studies in English Literature* に合わせて5点、

海外雑誌 *Modern Language Review* に1点——の論文が採用されるなど、先生の研究業績の華々しさは群を抜きます。わが国の文学研究は、いまでも紀要文化や同人誌文化を掛替えのないものとして大切にしており、杉村先生にもそのような書き物がたくさんあるのですが、それに加え、査読付きの権威ある学術雑誌に長期間にわたって積極的に投稿しつづけ、これほどの本数のすぐれた業績を有する日本の研究者は、そう多くはないのです。先生の主たる研究対象はアイリス・マードック、トマス・ハーディ、ウィリアム・ゴールディングといったイギリス作家の小説で、ラカン派の精神分析学や各種の文学批評理論を援用しつつ、象徴や比喩を詳細に吟味しながら、つねに精緻で手堅いテキスト分析を実践してこられました。とりわけゴールディング研究の成果は、ケンブリッジ大学ダーウィン・カレッジの客員研究員でいらしたところに結実し、母校の東北大学より博士の学位を授与されるとともに、*The Void and the Metaphors: A New Reading of William Golding's Fiction* (Bern: Peter Lang, 2008) として、海外の出版社から上梓されました。

教育面において、先生は、一般英語のほか、教職科目、専門共通科目および基礎科目としての英文学関連科目を、おもに担当してこられました。英語の授業では、正確に文章を読み解く方法を教示され、また英文学の授業では、さまざまな文体の特徴や文学批評理論について講義なさっていたことと思います。先生の講義は広く深い学識に満ちていたようで、英文学を中心に学んだ歴代の学生たちから、尊敬の念をもって感動しながら授業を受けている旨の言葉を、たびたび耳にしておりました。

多くの学生たちが敏感に感じとっていたように、先生は、幅広く奥深い教養と、その背後にある膨大な読書量をつねに感じさせる、学者らしい学者です。殊に文学批評理論に関しては、その広範な領域にもかかわらず、きつと何を質問しても答えを返してくださるだけの学識をお持ちのはずです。ところが、おそらくは恥ずかしがり屋なお人柄のため、質問しても、わからないフリをなさることが多く、そのような先生の謙虚なお姿を、いまでも印象深く記憶しております。いま思えば、困らせてしまうことを承知の上でお話

お付き合いいただき、先生の博学にもっとたくさん触れておけばよかった、などと考えております。

本学には、単科の商科大学でありながら、人文学分野の研究に関して誇るべき伝統があります。地方の小規模大学である本学が、商学関係者の間でしか知られていない大学ではない理由のひとつが、その点にあります。杉村先生の研究実績は、間違いなく、そのような歴史と伝統の一部となつて、国内外の英文学者たちに本学の名を広く知らしめました。われわれもまた、先生の研究姿勢を見習いつつ、それぞれの分野で、諸先輩方の築き上げた伝統をきちんと継承し発展させてゆかねばならないでしょう。

昨年度末、大学図書館のカウンター付近で、英文学研究や文学批評理論に関する書物が大量に返却されている風景を目にしたとき、とうとう杉村先生が本学を去られるのだな、と思いました。ふだんは寡黙ながら主張すべきことははっきりと主張され、きわめて真剣に、しかし同時にどこか愉しみながら、入試業務に黙々と取り組んでおられた先生のお姿が、なつかしく想起されます。先生のご退官に際し、まことに淋しいかぎりではございますが、ますますのご健勝を祈念いたすとともに、長年にわたるご指導とご厚誼に、心より感謝申し上げます。

ご苦労様でした。ありがとうございました。